稲こうじ病

本病は籾にのみ発生し、罹病穂では不稔粒が増加し稔実が悪くなり、千粒重低下など、減収につながる。また、罹病籾が混入すると、品質低下の大きな原因となる。本県では、8 月下旬頃から発生がみられ、主に浜通りや阿武隈山間、中通りで目立つ傾向がある。

1　病徴

乳熟期ころから、内外穎が少し開き、その隙間から緑黄色の小さな肉塊状の突起が現れ、徐々に肥大し、籾を包むように球状菌糸塊ができる。成熟すると、濃緑色ないし緑黒色となり、表面が粉状となって亀裂ができる。収穫期ごろになると菌糸塊の上に黒色の菌核が形成される。

2　発生生態

前年に土壌に落下した胞子が伝染源となる。イネを移植すると土壌中の胞子が根に付着し、表皮細胞の隙間から菌糸が侵入する。その後、茎の中を通って葉の生長点などに至る。穂ばらみ期には葉鞘に達し、出穂前の穎花の隙間から菌糸を侵入させる。菌糸は外穎側の基部にまで伸び、そこで転流してくる養分を奪い、病粒を成長させる。イネの出穂後には内穎と外穎の隙間から灰白色の膜に包まれた菌糸塊が現れ、次第に膜が破れて橙色の胞子塊が露出する。イネが成熟するにつれて胞子塊は暗緑色に変化する。

本病は穂ばらみ期が低温・日照不足、降雨の多い年に発生が多い。また、窒素の多用や遅い窒素追肥によっても発生が助長される。

写真　稲こうじ病罹病籾

3　防除方法

耕種的な防除としては、早生品種を栽培するか作期を早め感染好適期を回避する。また、施肥を適切にして窒素過多あるいは窒素の遅効きにならないように追肥には注意する。

常発地帯または天気予報などで穂ばらみ期の降雨が予想される場合は薬剤を散布する。